

漱石と佐々木東洋

日本私立病院協会特別会員
(財)佐々木研究所 理事長 黒川 雄二

御茶の水にある杏雲堂病院は、私が勤めている(財)佐々木研究所の附属病院である。その歴史は古く、初代佐々木東洋が明治15年6月1日(1882)に「杏雲堂醫院」として開院した記録(東京日日新聞掲載の広告)があるので、本年度で創立128年を迎えている。御茶の水界限では、順天堂医院、井上眼科に次いで三番目の古い歴史である。俗に「杏雲堂三代」と言われるように、佐々木東洋(1839-1918)に次いで、佐々木政吉(1855-1939)、佐々木隆興(1878-1966)が院長を務めたが今回は東洋について紹介させて頂く。



佐々木東洋
(30歳の頃)

東洋は、天保10年(1839)に江戸本所生まれ、20歳頃から佐倉順天堂で佐藤泰然らに、その後は長崎でポンペ博士についてオランダ医学を学んだ。江戸に帰ってから本所などで開業したが、戊辰戦争では軍医として、その後は大学東校(東大医学部の前身)や東京大病院(軍陣病院)を経て、東京府病院副院長、大学東校病院院長として診療に当たり、西南戦争では軍医を務めた。明治11年頃からは、明治医史で有名な「脚気相撲」に洋方医代表となり、西洋医学が漢方に優ることを示した。脚気病院が閉鎖された後、明治15年に現地神田駿河台に開業したわけである(なお詳細は、杏雲堂病院ホームページ)。

数々のエピソードがあるが、本人が「自分は偏屈な性格の持ち主で社会的ではない」と言っていたことで、医療には優れていたがかなり変わった人物だったようである。その点に関して夏目漱石による佐々木東洋人物評とでも言うべき文章を二つ紹介する。一つは漱石45歳で書いた「處女作追憶談」、もう一つは漱石51歳時に学生を対象とした「無題」という講演記録であるが、紙面の都合で一部だけ紹介したい。

「處女作追憶談」では、漱石自身で「自分は変物だが、己を曲げないで世の中に欠くべからざる仕事がありそうなものだ」に続いて、「その時分私の眼に映ったのは、今も駿河台に病院を持つ

て居る佐々木博士（政吉）の養父だとかいう、佐々木東洋という人だ。あの人は誰もよく知って居る変人だが、世間はあの人を必要として居る。而もあの方は己を曲ぐることなくして立派にやっ
て行く」と書いている。「無題」では、「佐々木東洋と云ふ醫者があります。此醫者が大へんな變
人で、患者をまるで玩具か人形の様に扱ふ、愛嬌のない人
です。夫ではやらないかと云へば不思議な程はやって、門
前市をなす有様です。あんな無愛想な人があれ丈はやるの
は矢張り技術があるからだと思ひました」と話している。
漱石は東洋の様な生き方を見本にしたかったのではなか
ろうか。

漱石が書いた当時、東洋は既に10年ほど前に院長を政
吉に譲り公職からも全て引退し、熱海で悠々自適の生活
を送っていた頃である。その時点でも、東洋は直接関わり
のない漱石にも強い印象を残すほどの人物だったことを示
す文章だと言えよう。



東洋の銅像
(杏雲堂病院玄関前)

